

漢法苞徳塾資料	No. 230
区分	治療論・配穴
タイトル	『難経』の「撰穴・配穴・取穴」論
著者	八木素萌
作成日	19回学会特別研究報告

1. 序言

日本経絡学会第16回学術総会以来の「鍼灸における『証』について」の討論は、経絡治療50年の歴史が提起している諸問題を多面的に検討した。その結果の一つとして『難経』16難の原理を主とする現行の取穴論はもっと拡張する必要があるとの合意をほぼ成立させた。取穴論に関連する議論の過程で「病は複数経が変動している場合が多い」との指摘も見られた。この「病は複数経に涉って変動する」病機を整合的に説明できる「論」が必要である。『難経』はこの問題を既に論理的に解決し、病因の診別論や病状に対応する撰穴論も明示している。「69難」はそのような「撰穴・配穴・取穴」論の一部に過ぎない。従って小論は「撰穴原理を拡張する必要」の一環として『難経』の「撰穴・配穴・取穴」論を概観し検討する。

2. 鍼灸治療の要諦は？

「…所謂迎随者・知荣衛之流行・経脈之往来也・随其逆順而取之・故曰迎随・調気之方・必在陰陽者・知其内外表裏・随其陰陽而調之・故曰調気之方・必在陰陽」(72)、手技の補瀉の根本を記述して「…陰気不足・陽気有余・当先補其陰・而後瀉其陽・荣衛通行・此其要也」(76)と述べ、「…鍼之要妙・在于秋毫者也」(74)と論じているように、経脈に気血を疎通させて陰陽を調和せしめて調気する事である。『難経の補瀉論に関して』（学会誌 No.16 所収）既論。

3. 補瀉決定の基準は？

「81難」は【補瀉の決定は脈に基づくのではなく病証の虚実に拠るべきである】と断じる。そこで問題は病証の虚実とは何か？となる。「48難」の記述がこれの基本になるが、「脈の虚実」「病の虚実」「診の虚実」を論じているので、この三者は、「＝」か「≠」か・それとも「＝」であったり「≠」となったりか？が問題である。「16難」に【肝病を意味する脈であっても、外証・内証・病候）などが肝病であることを示していない場合には、肝病の診断を下してはならない】と明言し、他の臓についても同様に論じる。

『難経』の病証論全体を見ても「不足病」「虚病」を論じるのは「14難」のみである。病の順逆判断について具体的な症例をあげて論じる「17難」は病の虚実を論じているのでは無い。また病の順逆の判断を論じる「13難」「18難末尾」なども、病の虚実の論ではない。脈状の現わす病証や順逆の意味を記述している「14難下段」も病の虚実論ではない。【「気」の留滞は陽経脈の「盛」となり、

「血」の留滞では陰経脈が「盛」となる】ことを記述する「37難」は病と経脈現象の関係を論じたのであり、「奇経」の病証を記述する「29難」の病は「寒」病証であるのは明らかで、「奇経」病証の「砭射」治療を述べる「28難」は、「…其受邪氣・畜則腫熱…」と「37難」の経脈現象観と同質のことを論じる。このように見て行くと「48難」の「脈の虚実」「病の虚実」「診の虚実」の三者の関係は「≠」であるのは明らかである。【病とは邪実なのであり、その様相は「陰・寒・臓の病」と「陽・熱・腑の病」に区分して把らえる】ことが重要で、『素問』刺志論第53にも「実者気入也・虚者気出也」とあるが、「48難」の「…病之虚実者・出者为虚・入者为实・言者为虚・不言者为实・緩者为虚・急者为实…」に従って「病の虚実」を決定して補瀉決定の基準にする。これが『難経』の補瀉決定論である。『難経脈論の構造』（学会誌 No.12 所収）で既論。

4. 穴性論と撰穴

「五俞穴」の性質と治効の問題は、五行配当の意味の多重性にある。「春・夏・季夏・秋・冬」「木・火・土・金・水」「出・流・注・行・入」「肝・心・脾・肺・腎」「風・熱・飲食劳倦・傷寒・中湿」「心下満・身熱・体重節痛・喘咳寒熱・逆気而泄」の様子に六層に意味を見ている。「…所謂迎隨者・知榮衛之流行・経脈之往来也・隨其逆順而取之・故曰迎隨…」(72)、「…迎而奪之者・瀉其子也・隨而濟之者・補其母也…」(79)これは相生関係の運用である。「…春刺井者・邪在肝：夏刺榮者・邪在心：季夏刺俞者・邪在脾：秋刺經者・邪在肺：冬刺合者・邪在腎…」(74)「…四時有数・而并繫于春夏秋冬者也…」(74)は、「…春夏者・陽氣在上・人氣亦在上…秋冬者・陽氣在下・人氣亦在下…」(70)や「10難」とともに、四季の「氣」は五行の性質が同類の臓や俞穴に親和性であることを記述していて、外邪の処理に意味がある事の指示でもある訳である。また、従って「50難」の五邪論と「49難」の病臓と病因の診別方法論との関連において「虚邪・正邪・実邪・賊邪・微邪」による病証治療の取穴論になる。「原穴」の「…五臓六腑之有病者・皆取其原也」(66)は「8難」の「原氣」論や「榮衛」「穀氣」論の「30・31難」と密接に関連するが、また、「正経自病」を明快に定義した「49難」とも関連して「正経自病」の取穴論への重要な示唆であろう。これは「俞・募穴」論の「67難」や「…不能治其虚・何問其余…」(75)や「81難」の記述とも関連している。

消化管の通過障害に「31・35難」と「七衝門」(44)が大きな示唆を為す。

「56難」を注意深く読めば「原穴」「五俞穴」「俞募穴」「八会穴」「三焦治穴」を、如何に組み合わせれば「積聚」の治療配穴となるか創案の示唆を与えている。(積聚病機図)

「金木水火土・当更相平…木欲実・金当平之…水欲実・土当平之」(75)(81に同類の記述)は「67難」「64難」「40難」「35難」「33難」は後代の『剛柔配穴』に道を開いていると言える。

以上

◇提出原稿

(積聚難経病機図)(難経病証表)(四十九難図)(脈状一覧表)(剛柔表)(李東垣；五邪病証表)